大祭司としての主イエスの祈り

ヨハネ福音書17章1-8節
【新改訳 2017】

17:1 これらのことを話してから、イエスは目を天に向けて言われた。「父よ、時が来ました。子があなたの栄光を現すために、子の栄光を現してください。
17:2 あなたは子に、すべての人を支配する権威を下さいました。それは、あなたが下さったすべての人に、子が永遠のいのちを与えるためです。
17:3 永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知ることです。
17:4 わたしが行うようにと、あなたが与えてくださったわざを成し遂げて、わたしは地上であなたの栄光を現しました。
17:5 父よ、今、あなたご自身が御前でわたしの栄光を現してください。世界が始まる前に一緒に持っていたあの栄光を。
17:6 あなたが世から選び出して与えてくださった人たちに、わたしはあなたの御名を現しました。彼らはあなたのものでしたが、あなたはわたしに委ねてくださいました。そして彼らはあなたのみことばを守りました。
17:7 あなたがわたしに下さったものはすべて、あなたから出ていることを、今彼らは知っています。
17:8 あなたがわたしに下さったみことばを、わたしが彼らに与えたからです。彼らはそれを受け入れ、わたしがあなたのもとから出て来たことを本当に知り、あなたがわたしを遣わされたことを信じました。

【祈りながら考えよう】

（１）１節で「父よ、時が来ました」の「時」とはいつのことですか。

（２）十字架によって現された御父の栄光はどんなものですか。４つ挙げて説明して下さい。

（３）主が弟子たちを信頼する根拠になっているものは何ですか。なぜ信頼できるのですか。

【解　説】

（１）大祭司の祈り

主イエスは弟子たちに、間近に迫ったご自分の死の意味について話された（**13-16章／告別説教**）。

これで、弟子たちに対する教えの大任を果たされたが、なお祭司としての務めが残されていた。

イエスは話し終わると、静かに祈りの姿勢に移られた。二階の広間で守られた最後の晩餐は「祈り」をもって終わる。

イエスは目を地から天に、すなわち、弟子たちから御父の方に向けると、「大祭司の祈り」と呼ばれるにふさわしい感動的な祈りを始められた。

創14:19/出28-29章レビ8-9章・21:10/ヘブル5-7章等

この祈りにおいて、イエスは、

①まずご自分のための祈り（1-5節）、

②次にご自分が去った後の弟子たちのために祈り（6-19節）、

③最後に弟子たちの宣教によって信者となる人々のために祈っておられる（20-26節）。

（２）目を天に向けて

「**イエスは目を天に向けて**」これはイエスが祈りの姿勢をとられたことを意味する。この姿勢はユダヤ人の祈りの姿勢として一般的なものであるが、この場合は特に、イエスが天におられる御父に目を注がれたことを印象づける。

比類なき御子であるイエスは、御父との深い人格的交わりのうちに、御父への信頼を込めて、「**父よ**」と呼びかける。そしてまず、ご自分のために祈られる。

（３）時が来ました

「**時が来ました。子があなたの栄光を現すために、子の栄光を現してください**」

イエスは、地上生涯における最期の時、すなわち、十字架に上げられる「**時**」が来たことを知り、

「**子があなたの栄光を現すために**」と祈られた。この意味は以下の２節が説明している。イエスはご自分を信じる者に永遠のいのちを与えて御父に栄光を帰された。神を否定していた人々が回心し、この地上で主イエスのいのちを現すとき、神に大いなる栄光がもたらされる（**ルカ18:43等**）。さらに、

「**子の栄光を現してください**」と祈られた。主は間近に迫る十字架上の死に目を留めておられた。もし主が墓の中に眠ったままであったら、主も他の人と何ら変わらない、と世は思うことだろう。

しかし、もし神が死者の中から主をよみがえらせて主に栄光を与えられるなら、神の御子、世の救い主であることの証拠となる。神はこの願いに答えて、主イエスをよみがえらせ、天に引き上げ、栄光を与えられた（**ピリピ2:9**）。

（４）救いのわざを成し遂げることによって

御父が「**わたしが行うようにと、あなたが与えてくださったわざ**」（**4節**）救いのわざを「**成し遂げる**」ことによって、すなわち、十字架の贖いのわざにより、「**御父の栄光**」を４つの面で現された。

①御父の知恵：御父は義であられるのに、不敬虔な者を義とするという計画をお立てになった（**ロマ4:5**）。

②御父の真実：女のすえが蛇の頭を打ち砕くという約束（**創世記3:15／原福音**）を守られた。

③御父の聖さ：神の律法の要求を、私たちの「身代わり」を通して満たされた（**ロマ8:4**）。

④御父の愛：永遠から共におられたひとり子の御子を仲介者、贖い主、罪人の友として与えて下さった（**ヨハネ3:16**）

（５）永遠のいのちを得られる道

「**あなたは子に、すべての人を支配する権威を下さいました。それは、あなたが下さったすべての人に、子が永遠のいのちを与えるためです**」

十字架における贖いのみわざの結果として、神は「**すべて**」の人間を「**支配する権威**」を御子にお授けになった。この権威があるからこそ、御子は、御父に「**いただいた**」人々に「**永遠のいのちを与える**」ことができる。

「**永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知ることです。**」

どのようにしたら「**永遠のいのち**」が得られるのかが、ここで簡単に説明されている。それは「**神**」と「**イエス・キリスト**」を知ることによってである。「**唯一のまことの神**」は、決して本物の神々とは言えない偶像と対極をなす。

すべて信じる者に与えられる「**永遠のいのち**」は、「**唯一のまことの神**」をより深く「**知ること**」である。

唯一のまことの神を知る知識は、神が遣わされたイエス・キリストを通してでなければ得られない。「**イエス・キリストを知ること**」が、「**唯一のまことの神**」をより深く知る道である（**14:6**）。

（６）弟子たちへの信頼

次にイエスは、御父がご自分に下さった弟子たちのために祈られる。この主の祈りにおいて、主が父なる神に語られたことの中に、弟子たちへの信頼があるということである。

主は、父なる神に対して、ご自分の弟子たちが、「**みことばを守りました**」とか、「**わたしがあなたのもとから出て来たことを本当に知り、あなたがわたしを遣わされたことを信じました**」と語っておられる。

主は、その夜、その十一人の弟子たちが主だけを残して逃げて行ってしまうこともご存知であった。主はこの祈りの直前に、弟子たちに向かって、そう言っておられる（**16章32節**）。

それをご承知の上で、父なる神にこう言っておられるということは、主が弟子たちをどれほど信頼しておられたかということを知ることができる。

それだけでなく、主は弟子たちがたとい一時的には主を捨て、主を否むことがあっても、彼らが主から決して離れてしまわないこともご存知であった。たとい躓くことがあっても、主が一度彼らを捕らえられた以上、主は彼らを手放すことをなさらない。それは、「**あなたがわたしに下さったものはすべて、あなたから出ていることを、今彼らは知っています**」と祈っておられる通り、すでに神のものであるからである。

（７）御言葉は人を育てる

主は、こうも言われた。

「**あなたがわたしに下さったみことばを、わたしが彼らに与えたからです。彼らはそれを受け入れ、……**」

つまり、御言葉が彼らを養ってくれる。神の言葉は、人を育てる。御言葉への信頼である。御言葉を一度受け入れた者のうちに、御言葉は働き続ける。御霊の神が、御言葉と共に働かれる。